

第2テモテ 2章。このテモテの手紙**第1・第2**は牧会書簡というものに分類されます。牧会書簡と呼ばれるのは、テモテ以外にも、**テトスへの手紙**も牧会書簡と呼ばれます。牧会というのは牧師の仕事のことです。羊飼いの仕事ことを牧会といいます。牧師のテモテに宛てられたのが、このテモテの手紙。そして、これが、パウロが書いた最後の手紙となっています。いわゆる絶筆ということです。我が子とも呼ばれているテモテ、彼はエペソ教会の若き牧師で、パウロの後継者でありました。その彼に最期の言葉を、死を目前にしたパウロが獄中から書き送るのであります。今パウロはローマの獄中にいて、狂人皇帝ネロによって間もなく首をはねられようとしております。その死期を彼は悟って、最後のメッセージとして自分の愛する後継者テモテにこの手紙を書くわけであります。で、**2章1節**に目を留めて下さい。『**そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。**』“そこで”という言葉は原文ではギリシャ語の接続詞で“それ故”という言葉であります。当然これは前章の**1章**の内容を受けてのことです。『**それ故我が子よ。**』先週、テモテは神の人と呼ばれながらも（神の人と呼ばれる人は聖書の中で希少人物です。本当に一握りの限られた人にしか、神の人という称号は与えられていませんけども、テモテは神の人と呼ばれているわけですが）、にもかかわらずテモテは弱かったんです。軟弱だったんです。胃がキリキリして、水ばかり飲まないでぶどう酒も、これは正確には水割りぶどう酒として、当時の医薬品として、胃腸薬として、摂取しなさいと。虚弱体質だったわけです。これは生まれつき虚弱体質だったというよりも恐らくは神経的なもの、ただ神経質で非常に精神的に弱い部分があったわけです。それがすぐに胃にくるわけです。ちょっとプレッシャーを感じると胃がキリキリしてくる。そのことを示唆しているのは、いくつかのこの手紙の中の言葉に見られるんですが、特に先週見た**第2テモテの1章7節**に『**神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。**』“おくびょうの霊”とあります。彼は気弱だったんです。すぐに人を恐れてしまうわけです。そんな弱々しい者でも神の人と呼ばれ、神に用いられるという事は、私たちにとっても大きな励ましであります。こんな弱い人は神の人と呼ばれるには相応しくない。神の働きには相応しくないから用いられないと思うかもしれません。こんな私は弱いから。肉体的にも精神的にも弱いから、だから私ようなものではとても用いられないとあなたは思うかもしれませんが、しかしパウロも弱かったんです。パウロも肉体にはハンディキャップを背負っていたんです。彼はアジアの風土病にかかって恐らくは目を不自由にしてしまったと思われます。一生の後遺症を持って、弱視であったわけです。で、見てくれもあまり立派ではありませんでした。背もそんなに高くなく、頭は禿げ上がり、背骨は曲がり、鼻は鉤鼻で、しかも弱視である。彼の話しぶりはなっていない、あまりにも弱々しいと非難さえ受けたわけです。このことは**コリント人への手紙**の中にも言及されています。そんなパウロでも、弱いこそ強いんだと。この弱さのうちにキリストの完全な力が現されるんだと。**第2コリントの12章**で彼はむしろその弱さを誇るとすら言っています。イエス・キリストの恵みは私の上に充分である。弱いけれども恵みは充分ある。だから私は神の働きを担うことが出来る。むしろ、自分の力の限界を遥かに超えて、自分にはとても出来ないことですら出来る。そして、弱いからこそ人々は「あんな弱い人が何故こんなことが出来るのだろうか。こんな無能力者に一体どこからこんな素晴らしい力強い能力が発揮されるのだろうか。」結局は人々はすべての栄光をその人にではなく、その人を用いられた神に帰するようになるわけです。時々私は思います。なぜ神様は人間を用いるのか。なぜ神様は教会を用いるのか。却って人間だとか、教会を用いれば、神の栄光を傷つけてしまうのではないのか。むしろ、天使だっているんだから、天使を用いたほうがもっと効率よく、もっとスムーズに、障害なく神の働きを進めることが出

来るのではないか。何故わざわざ敢えて人間のようなものを、教会のような不完全なものを使うのだろうか。人々は人間につまづきます。教会を指差して「なっていない。」粗探しをされて、偽善者の集団だと言われてしまうわけです。その都度人々はつまづいて、そして逆効果をもたらしてしまっているかのように私たちは思ってしまう。ところが私たちの神は偉大な神です。もし、天使を使うならば人々は「あっ、あの天使は素晴らしい。完璧だから。あの天使は素晴らしい。この天使を拜もうと。」人間の傾向をよくご存知なわけです。でも、逆にもし人間のように不完全で罪深い弱々しい偽善者と呼ばれて相応しいものを神が用いるならば、人々はどうでしょうか、どう思うでしょうか。人間が素晴らしいとは言いません。なぜならば不完全で罪汚れていてどうしようもない救い難い連中だからです。「やっぱり神様はいるんだ。やっぱり神様は凄いんだと。」人間が凄いんだではなくて、神が凄いんだと。すべての栄光はこの神に帰せられるようになるわけです。すべてのクレジット、手柄は神様にのみ帰せられるわけです。人間はなっていない。でも、神はこのなっていないものすらつくりかえて用いて下さる。それが神の意図なわけです。敢えて天使を使わない。もし、これは何でもいいんですけれども、名工と呼ばれる人間国宝のような偉大な職人さんが、偉大な匠が、つまらない不完全な道具を使って名作を作り上げるとしたらどうでしょうか。人々は道具が凄いとは言いません。「あんな道具を使っても、こんな素晴らしい作品を描けるなんて。こんな素晴らしい作品を作り上げることが出来るなんて、やっぱりこの人は偉大であると。」道具ではなくて、その道具を使う者に栄光が帰せられるわけです。それが神の意図だということをいつも覚えて下さい。私たちはただの道具なんです。しかも不完全な道具なんです。でも、完全な匠がその道具を使って下さる時、凄いことが起こるわけでありまして。敢えて天使を使わず私たちのような人間を使う。そのことを私は最近強く思うようになりました。第2テモテ 2:1には『そこで、(それ故) わが子よ。(あなたは確かに弱い。確かにあなたは欠けだらけである。確かにあなたは不完全である。しかし、) キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。』今私がお話しして来た事は、恵みです。分不相応な者に与えられる過分な親切です。弱いパウロに注がれた神の恵み、それは充分であった。弱い時にこそ強いキリストの完全な強さが、力が弱いものに現される。それはすべての栄光が神に帰せられるためであります。何も出来ません。その人こそ資格者であります。ピリピ 4章 13節には『私は、私を強くして下さる方によって、どんなことでもできるのです。』自分は強いと思ってる人は、神の力に依存しようとはしません。自分の力に依存して、自分は何でも出来ると思い込んでいます。でも、いつかその人は力尽きることになります。精根尽き果てる時が来ます。頑張っても、頑張っても、報われなければ、燃え尽きてしまうこともあるわけです。「誰も認めてくれない、誰も褒めてくれない、誰も感謝してくれない、私がこんなに頑張ってるのに。これまで頑張ってきたけれども、もう限界が来た。」そういう時に私たちはつまづいてしまうのであります。しかし、弱くても私を強くして下さるお方、イエス・キリストによって弱い者も強くされ、何も出来なかったことも何でも出来るようにされ、そしてそのことを自分自身もそうなんです、あなたの周りの人々もただただ神に賛美をささげ、本当に凄いのは人ではなく神であると、異口同音に神に感謝と栄光を帰するようになるわけです。これが恵みによって強くされるということです。精神が薄弱で、肉体が虚弱だったテモテに対して、あなたは精神において強くなりなさいとか、肉体において強くなりなさいとは言わなかったんです。恵みにおいて強くなりなさい。“恵みによって”という言葉は、『恵みにおいて、恵みの内に』というのが直訳です。私たちは神の恵みの中に留まらなければいけません。精神力を強めるとか、肉体を強靱にするとか、またいろんなスキルアップをする、技術を磨く、テクニックを獲得する、そういうことによって自分を強くするものではありません。私たちはこの恵みによって若しくは恵みにおいて強くならなければなりません。そのことが今日皆さんにも勧められていることです。むしろ、勧めと言うよりは命令されていることです。私たちの肉の傾向では、恵みによって強くなるとうということよりも、自分の出来ることによって強くなるとうとするわけです。それはいわゆる律法主義です、行為義認というものです。何かをす

ることによって、もっと頑張ることによって、もっと聖書を勉強し、もっと祈り、もっとアクティブに教会で奉仕をして、いろんな活動をして頑張らなければ強くなれない、もっと自分がしなければ。それが律法主義です。それが行ないというものです。しかし、私たちはそのような律法主義から離れて、恵み主義に基づいて、恵みにおいて、恵みによって自分を強くしなければいけません。そうしない者は“神の人”と呼ばれるに相応しい者とはなれないわけです。神の人は肉体的に強い人、精神的に強い人、知的に強い人、何でも出来る人じゃないんです。真逆です。全く相応しくない者です。でも、その人は十分な神の恵みを受ける時、強くなるわけです。内村鑑三の言葉も紹介したいと思います。『自分が働くのではない。主が働くのだ。自分が働こうとするから疲れる。主に仕えるのだ。』と言っています。自分が働くのではないと言っても、何もしないで怠けて良いという意味ではありません。そうではなくて、自分を主に道具として使って頂くべく捧げきるということです。自分をなくすということです。そして主に徹底的に取り扱って頂いて、使って頂くという事。そのための努力を私たちは惜しんではなりません、最早道具として勝手に動こうとすることをやめるということです。完全にこの主権者の手に握って頂くために、自らを明け渡すこと。そうすればあなたは決して疲れることはありません。行き詰まる事はありません。

また、カール・ヒルティという人の言葉も併せて紹介します。『キリスト教の信仰の最も素晴らしい点は、人間が自分自身の力を当てにしたり、自分と議論したりする必要がなく、ただ神のみを相手にすれば良いことである。』名言ですね。逆に言えば、キリスト教以外の宗教は、人間が自分の力を当てにする、自分と議論する、これが必要であると。でも、キリスト教は、ただ神のみを相手にすればそれで良いんだと。自分がどうのこうの、自分のものとか、自分が、自分は、自分に、自分のとか、そういう自分というものから完全に解放されているわけであります。ただ、神のみを相手にすればいい。ただ、神の恵みだけで良いわけです。自分の行い、自分の頑張り、自分の敬虔さ、自分の信仰深さ、自分の熱心さ、それは必要無いわけです。ただ、神の恵みに浸り込めば良いわけです。ただ、神の恵みの下に自らを置けば良いわけです。

また、同じラインでD.M.ロイドジョーンズの言葉も紹介します『クリスチャンの生き方は、もはや規則や戒律の問題ではなく、神がこれまでに成し遂げて下さった一切のことに感謝を表したい、との願いが中心となるのである。』これは一言で言うと、神の恵みに対する応答がクリスチャン生活であるということです。自分が何かをするんじゃないで、神が既にして下さったこと。これが恵みです。これに対して応答することがクリスチャン生活であるということです。ですから常に神がイニシアチブを取っておられる。先手を取っておられるということです。私たちが神を愛するよりも先に、神がまず私たちを愛して下さっているわけです。それに対して私たちが応答するだけです。私たちが愛するから、神が初めて私たちを愛して下さるようになるのではありません。私たちが頑張ってるから、そこで初めて神が私たちを用いて下さるのではありません。全くの正反対です。頑張っていないなくても、何もしていないなくても、神がまずすべての事をイエス・キリストにおいて成し遂げて下さったわけであります。ですから、このキリストとキリストの力を完全に信じ、自分の力だけでキリストのために生きようとしなないということです。これが今私たちに求められていることです。『わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。』強くなりなさい、強くなりなさいと、聖書の中にはこの命令が繰り返されています。私たちは強くない者ですから、命令される必要があるわけです。ヨシュア1:6にも、モーセの後継者のヨシュアも弱かったわけです。でも、そんな彼にモーセはこう言っています。『強くあれ。雄々しくあれ。わたしが彼らに与えるとその先祖たちに誓った地を、あなたは、この民に継がせなければならないからだ。』7節にも『ただ強く、雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行なえ。これを離れて右にも左にもそれてはならない。それは、あなたが行く所ではどこでも、あなたが栄えるためである。』“強くあれ、雄々しくあれ”と命令されています。また、ダビデから後継者の息子ソロモンに対しても同じメッセージ

が語られています。第1列王記 2:2 『²「私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。(ダビデの遺言です。) 強く、男らしくありなさい。³あなたの神、主の戒めを守り、モーセの律法に書かれているとおりに、主のおきてと、命令と、定めと、さとしとを守って主の道を歩まなければならない。あなたが何をしても、どこへ行っても、栄えるためである。」 3節までお読みしました。“強く、男らしくありなさい。”モーセからヨシュアへ、またダビデからソロモンへと、そしてパウロからテモテへと、同じメッセージが語られています。我が子よ。皆さんの子供にも同じメッセージを伝えて頂きたいと思います。父親として母親として最後の言葉として、これが遺言として、強くありなさいと。ただ、重要なのはキリスト・イエスにある恵みによって強くありなさいということです。これがクリスチャンライフです。弱いままで良いのではありません。キリスト・イエスにある恵みによって強くなれるんです。

テキストに戻って頂いて 2節『**多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。**』これもまさに遺言であります。パウロが教えたことをそのまま後継者のテモテが受け継いだわけです。で、そのテモテがパウロから受け継いだものを今度はエペソの教会員に受け継がせるように。そして彼らもまたパウロと同じメッセージを語るように。パウロのメッセージと全く同じメッセージを、コピーして、それをシェアするように、分かち合うように。モーセからヨシュアへ、またエリヤからエリシャへ、パウロからテモテへ、ダビデからソロモン、皆同じです。同じメッセージを語り継いでいくように。これが大事なんです。世の中では、世俗の世界では、同じメッセージをコピーしてはいけない、いわゆるコピペはいけないと。大学の論文などでよくコピペ、コピーしてペーストする、人の論文をそのままコピーして使う。自分のオリジナルであるかのように装って書く。そういうことがまた問題になっています。中学生でも夏休みの宿題を、作文などを全くコンピュータの方からコピーして、ダウンロードしてそのまま使う。問題になっています。でも、教会の中では、キリスト教世界では、コピペは問題にはならないんです。それでいいんです。逆に、オリジナリティとかクリエイティビティを追求したらそれが問題になるんです。新奇な教え、今まで誰も教えたことのないような教え、誰も気付かなかったような、発見できなかったようなものを教える。それが却ってキリスト教世界では問題となります。それこそがまさに異端の種というものです。「神から新しい啓示が与えられた。これは聖書に書かれていないけれども。これはイエスの教えにないけれども。でも、これは特別に神が私に直接的に啓示して下さったものである。私はイエスに出会ったんですとか、枕元にイエスが立ってこう言われたんですとか、または、天使が私に特別な啓示をもたらしてくれたんです。」それが異端の特徴なんです。エホバの証人にしても、モルモン教にしても、統一教会にしても、キリスト教三大異端のすべてはオリジナリティの追求から生まれてしまったものです。元々は正統派の教会に集っていたんです。それぞれの創始者たちは、プロテスタントの正統派の教会に集っていて、彼らはそこで私たちと同じように聖書を読み、学んでいたわけですが、その中で彼らはオリジナリティを追求するようになったんです。「これは今まで正統派の教会では教えられたこともなかったものである。地獄なんて本当はないんだとか、裁きなどないんだ。」と。そういうことも自分の考えや都合に合わせるようにして、特別な啓示であると彼らは主張して、異端的な教えを教会内で説くようになったわけです。そこから異端が派生していったわけです。ですから、今私が皆さんに教えていること、皆さんは聞いてノートに一生懸命とっているもの、それをそのままそっくりコピーして、そのままそっくり伝えて頂きたいと思います。もちろん自分の個性を含めても構いませんし、自分の独自の言い回しもあるでしょう。でも、内容を変えてはいけないんです。極端なことを言えば、私のメッセージを一言一句コピーして、他の教会でメッセージして頂いても構いません。コピーライトなどありませんから。聖書にコピーライトなんてないんです。私は聖書そのものを教えているつもりですから、私にコピーライトがあるとは思っていません。私に著作権があるとは思っていません。著作権は神にのみです。私のメッセージも、聖書の言葉も、すべてこれは神のコピーライトです。私がもし聖書から外れて、自分のオリジ

ナリティをそこに作り上げて、独自のメッセージをしているならば、私にコピーライトはあるのかもしれませんが。著作権は私にあるのかもしれませんが。でも、それが必ずしも永遠に価値があるものとは言えない、それは真理とは言えないということです。真理は変わらないんです。変わらないものを変えてはいけません。書き換えてはいけません。付け足しても、省いてもいけないんです。真理は真理としてそっくりそのままコピーして伝えなければいけないです。ですから、そんなに難しく考えないで下さい。「私のような者は、聖書を説いたり、分かち合ったり、教えたりするような事は出来ません。カズのように教えられるれません。あの牧師のように教えられるれません。」そんな風に思わないでください。私の言ってることをそのままそっくりコピーして伝えれば良いんです。で、それをカズの言ったことと言わなくて良いんです。これは私のオリジナルだと言って頂いて良いんです。私が教会で学んだことを、私が吟味して、そしてそれは聖書に照らし合わせて正しいと判断したので、私はこれを伝えます。「牧師の言った事だから、カズのメッセージだから」と、言うんじゃないで、それをあなたが聞いて正しいと判断したならば、それはもうあなたをメッセージなんです。このことを皆さんに伝えておきたいと思います。そうすれば皆さんも委ねられたものを自分の中にだけ留めるのではなく、それを分かち合うようになると思います。このことを私も皆さんへの遺言として伝えておきたいと思います。今日私が天に召されたら、思い出して欲しいと思います。私が今日語ったこと、それをそのままそっくりあなたはコピーして伝えなければいけないんです。もし、それが真理であるならばこそです。真理でなければ伝えてはいけません。カズが言っていることは間違っている、であるならば伝えてはいませんが、それが聖書に照らし合わせて正しい、真理だとあなたが納得したならば、理解したならば、それを“あなたのメッセージ”として伝えなければいけないんです。これはカズの受け売りだとか、これは牧師の言っていることなんですとか、そういうことを言う必要はないんです。で、誰かから「それはカズのメッセージそっくりそのまま、コピーじゃないですか。」と、言われたら喜んで下さい。認めてもらったと思って下さい。牧師と同じことを言っているんだと思って、むしろ主に感謝をして頂きたいと思います。

次に、**3節4節**に目を移して下さい。『**3**キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにして下さい。**4**兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。』思い出して下さい、これは牧会書簡ですから特に牧師に宛てて書かれているものです。牧師とはどういうものか。牧師の仕事、牧会とはどういう働きなのか。もちろん皆さんは全員「牧師ではありませんから関係ない。」と思ってはいけません。皆さんも牧師という肩書きやタイトル・称号は持っていないかもしれませんが、でも牧会的な働きをすべてのクリスチャンは担っているということを忘れてはいけません。御言葉を聞いて学んだならば、それをあなたは分かち合う、シェアする。委ねられたものを今度は教えていく必要が、あなたにもあるわけです。今日聞いたことをもっと若い未熟なクリスチャンたちに、自分の子供たちに、孫たちに伝えていく必要があるわけです。で、その牧師にどうということが求められているのか、いろいろなたとえというものが**3節**以降に見られます。牧師は兵士にたとえられています。“キリスト・イエスのりっぱな兵士”りっぱという言葉は、「有用な兵士、できる兵士、優秀な兵士」という言葉です。優秀な兵士は苦しみを共にするものです。苦しいからといって逃げないものです。パウロは同労者たちのことを時折“戦友”と呼んでおります。一緒に戦い、一緒に苦楽を共にするわけです。で、ここではっきり分かっている事は、ミニストリー、神の働き、とりわけ牧会というものは戦いであり、苦しみであるということです。神の働き、ミニストリーは、戦いであり苦しみであるということ覚えて下さい。生半可なものではないんです。楽に出来ることではないんです。いつも平和であるわけじゃないんです。常に戦いを強いられていく、そして苦しみが伴うということです。そこは戦場です。ですから、**4節**に『兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。』まあ、日本には今現在兵役というものはありません。徴兵制度というのはないわけですけども、か

つてはあったわけです。もし、私たちが兵役につくならば、当然戦いに不要なものは持って行く事はないわけです。戦場に大画面テレビなんて持って行かないわけです。戦場にサーフボードとか、スノーボードとか、持って行かないわけです。遊びに行くんじゃないです。戦いに行くわけでありませぬ。戦いの備えをしていかななくてはなりません。もちろん、私は牧師の家には一切そうした娯楽の類の物を置いてはいけな
いと云っているのではありませぬ。そうではなくて、ミニストリーは遊びではないということです。ミニ
ストリーは戦いなんです。エンターテイメントなんてそこには含まれないわけです。もちろんクリスチャ
ンじゃない人たちをキリストのもとに導く際に、エンターテイメントを1つの道具として使う場合もあり
ます。でも、牧師自身がエンターテイメントに耽^かっているようなそんな暇はないと云っているわけです。
“日常生活のこと”という言葉は、自分の生活を支えるということも含めての言葉です。残念ながら日本
の多くの教会は小さく、牧師の家族を教会員が養って、教会の給料だけで牧師の家庭が十分に生活でき
るとは限りませぬ。なかなかフルサポートを受けるということは難しいところです。従って牧師は牧会生活
から給料を十分に得ることが出来ないの、家族を十分に養うことが出来ないの、教会の外でアルバイ
トをしたり、サイドビジネスをして家族を養うということもいたします。ただ、注意しなければいけない
事は、本来であれば牧師は十二分に教会の中で働きをなすためには、教会の中で教会員から十分な糧を得
る、給料を得ることが望ましいということです。パウロは、天幕職人として教会からフルサポートを受け
ることを時折辞退しました。それは特別な事情があったからです。コリントの教会ではとりわけパウロの
使徒職を疑っていて、「パウロは真の使徒ではない。」ですから、自分をキリストの使徒として認めてくれ
ないような、そんな教会から献金を受けるわけにはいかなかったわけです、サポート受けるわけにはい
かなかったわけです。その一方で、その他のピリピの教会などからは喜んでパウロはサポートを受けていま
す。本来はそうあるべきだということもパウロは言ってますけれども、そのようにして特別な事情がない
限りは牧会者は教会から十分にサポートを受けるべきで、日常生活は充分支えられるんだと。そうす
ること教会における働きに集中できるわけです。日常生活のことに掛かり合わずに、バイブル スタディーと
か、とても平日にやってる暇は無い。牧師はどこかでアルバイトをして、家族のために働かなきゃいけ
ない。これは非常に残念な姿です。もちろん教会を始めたばかり、開拓したばかりの頃は、大半の牧師は私
も含めてですけども、そのような生活を強いられることもあると思います。私も最初は教会から一切給
料をもらっていませんでした。無給で働いておりましたけれども、そういうケースもありながらも、いつ
までもそれで良いという事ではありませぬ。で、時に牧師の側でもだんだんといわゆるサイドビジネス
の方が、パートタイムの仕事の方が忙しくなって、そちらから給料をより多く得られるようになってき
ますと、そちらのほうに重きを置いてしまい、牧会の方が片手落ちになってしまう、おろそかになっ
てしまうということも出てきます。その最たるものは結婚式です。日本の結婚式のおよそ6割7割はキ
リスト教式の、教会式の結婚式であります。教会から十分に給料を得られないということで、牧師
たちはそのようなホテルだとか結婚式場での司式をアルバイトとしてやるようになります。でも、そ
ちらの方がお金が良いわけです、短時間で稼げるわけです。でも、そのような結婚式は多くの場
合土日に行われます。日曜日の礼拝の時間とバッティングすることがあるわけです。でも、その
時に教会から十分な給料が得られないので牧師は仕方なく結婚式の方を選んだりするわけ
です。最初は仕方がないところから始めたものが、いつの間にか結婚式の件数が増えて充分
すぎる給料が得られるようになってきますと、そちらの方が主体となって教会の方がおろそ
かになっていくわけです。日常生活のことに掛かり合ってしまうという問題が生じてくるわけ
です。また、他には教会で英会話教室を運営するとか、幼稚園を運営する。お金になるわけ
です。ただでやっているわけではありませぬ。で、そちらの方が忙しくなって、そちらの稼
ぎが上がってくると、だんだん牧師も日常生活に掛かり合ってしまうようになります。これは
キリストの立派な兵士とは言えない姿であります。でも、それを認めたくないの
で「これはミニストリーです。」と言い始めるわけ

です。「結婚式はミニストリーです。そこで福音に触れたことのない人たちに伝えるんです。英会話教室もこれもミニストリーです。聖書もついでに教えるんです。幼稚園もこれもミニストリーです。小さい頃に福音を聞かせれば、大きくなっても離れないから。」一理あります。半分は正しいと思います。でも、ミニストリーならば私は全て無料でなすべきだと言っているんです。無料でやるようになったら、多分やめると思います。そんな暇はないと思うからです。教会で牧会生活を送る中で、何が大事なのか、優先すべきなのか、兵士として戦う上で障害となってくるもの、優先順位というものも常に吟味しなくてはなりません。ただ、誤解がないように釘を刺しておきますけれども、牧師が結婚式をすとか、牧師が英会話教室を運営すとか、幼稚園を運営するのは、すべて非聖書的で間違っていると言っているんじゃないありません。ただ常に日常生活に掛かり合ってしまうという誘惑がそこにあるということを言っているんであります。ほどほどにしなくてはいけないと言っているんです。で、むしろ求めるべきは教会から独立し自立することよりも、むしろ教会に依存すべきだと言っているんです。教会を通してサポート受けるべきなんです。それが本来の姿、健全な姿です。あくまでそれらの働きは、サイドビジネスは、パートタイムのアルバイトは、一時的なものでなければいけないと言っているんです。むしろ、英会話教室でも、幼稚園でも、教会から切り離さなければいけないと言っているんです。

で、話を戻していきたいと思います。“立派な兵士”とは、どういう兵士なのか。日常生活に掛かり合っていないといけないということ。そしてその次に、4 節の終わりに『徴募した者を喜ばせる』このことも私たちに求められていることです。徴募した者とは当然、私たちの主イエス・キリストのことです。クリスチャンは皆、イエス・キリストという司令官を持っています。この言葉はヘブル 2:10に見られる言葉です。『神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであったのです。』“救いの創始者”のところの“創始者”に*印が付いています。欄外を見て頂くと、別訳「指導者」または「君」とあります。「指導者」、「君」これは「司令官」とも訳せる言葉、“コマンダー”ということ。兵士は上官の命令に対して絶対服従が求められます。司令官の言う事は絶対であります。「命を捨てろ。」と言われれば、命を捨てなければいけない。それが軍の掟というものです。怖いからといって命令に反して逃げ出してしまえば、それは軍法会議にかけられる。場合によっては死刑に処せられるわけです。厳しいかもしれませんが、それを覚悟して兵士たちは兵役につくわけです。もちろん軍国主義でかつての大日本帝国のような国家神道を利用したカルトまがいの掟では、お国のために、天皇陛下のために命を捧げようと、それに対して従わない者はもちろんその場で処刑されることも、脅されながら、そのまま生きて帰れば生き恥をさらすだけと、まあいろんなプレッシャーもありながら、若き命は散って行って、無駄にして、犬死にしてしまった者もあったわけです。でも、靖国神社に祀られるから、神様になれるからと、いろんなことを言われながら納得がいかに死んでいった者たちも後を絶たないわけですが、ただ私たちは徴募した方がどういうお方か知っております。本当の現人神^{あらびとがみ}です。生ける神であります。で、この神は私のために、あなたのために、十字架に掛かって死んで下さった方です。自らが戦いの第一線に出て私たちの身代わりとなって死んで下さったような司令官なんです。そして甦って下さった偉大な救いの創始者、救いの君であるわけです。救いの指導者であるわけです。そのような方の命令ならば、たとえ火の中、水の中。喜んで私たちは命を落としてでも、殉教してでも、従うことが出来るはずであります。誰に仕えているのか、誰の命令に聴き従うべきなのか、常にこのことも考えさせられるわけです。で、救いの創始者がどういう方か分かったならば、立派な兵士であるあなたはその司令官の命令に絶対服従しなければいけません。自分の意見などそこには挟^{さしはさ}まれてはいけないんです。命令は絶対です。命令されても納得いきませんかとか、私の考えに合いませんとか、私はこう思いますとか、そういう事は通用しないと言っているわけです。もし、あなたが神に用いられたかったならば、あなたは常に権威の下にある者だということ

忘れてはいけません。自分のオリジナリティとか、自分のアイデアとか、自分の好き勝手に何か出来ると思っているならば、あなたは神に用いられる者ではありません。それがミニストリーというものです。マタイの福音書 8 章 8 ～10 節に目を留めていただきたいと思います。『⁸しかし、百人隊長は答えて言った。「主よ。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ただ、おことばをいただきさせてください。そうすれば、私のしもべは直りますから。⁹と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私自身の下にも兵士たちがいて、そのひとりに『行け。』と言えば行きますし、別の者に『来い。』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ。』と言えば、そのとおりにいたします。』¹⁰ イエスは、これを聞いて驚かれ、ついて来た人たちにこう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしはイスラエルのうちのだれにも、このような信仰を見たことがありません。」これが神に評価される立派な兵士の姿です。権威の下にある者は、「行けと言えば行く、来いと言えば来る、これをせよと言えばする。」文句はありません。自分の意見もありません。自分の主張もないんです。ただ黙って従うだけです。それが神に用いられる立派な兵士です。こういう事を聞いても私たちはなかなか耳慣れないので、というのは私たちは兵役につくことがないので、兵士になったことがないので、これはなかなか理解に苦しむ感覚かもしれません。むしろ、カルトの教会とか、指導者の言う事は絶対である、指導者の言う事は神と同じことであると、そういう教会で傷ついている人たちも大勢いることも確かであります。ただ、その指導者が誰なのか。このことが 1 番大事であります。徴募した者がいったい誰なのか。そして、私は権威の下にある者として常に謙^{へりくだ}っていなければいけないということです。謙遜でなければいけないということです。もし、その指導者がイエス・キリストのような指導者であるならば、ふんぞり返っていません。ただ口先だけで命令し、顎^{あご}で使うような者ではありません。もし、その指導者がイエスキリストのようであるならば、その人は心優しくへりくだっています。そして、その人は自ら率先して百人隊長のように戦いの第一線に行き、そして体を張ってまで部下を守るために戦います。自分が率先して模範を示すように戦うんです。汚い弟子たちの足を率先して洗って、互いに仕え合うとはこういう事だということをちゃんと差し示してくれます。模範をもって教えてくれます。そういう人の言うことならば、あなたは絶対服従出来るはずですよ。そのようにして私たちも指導者に対して、リーダーに対して、従って行かなければならないということです。で、もちろんこれは教会の中だけではなく、いろんな領域に適用出来ると思います。家庭において霊的リーダーはあなたの夫です、あなたのお父さんです。「でも、もしリーダーが、教会のリーダーでもいいですし、家庭のリーダーでもいいですけども、そのリーダーが間違っただけで決断をしたらどうなるのですか。それにも従わなきゃいけないんですか。」場合にもよるんですけども、基本的には従わなくてはなりません。神は私たちが正しいことをするよりも、私たちが正しい人間になることに関心を持っておられます。私たちはどちらかと言うと正しいことをしなければ、「これは間違ってる。正しくないよ。」ということばかり主張しますが、神はむしろ私たちに、正しい人間になってもらいたい。で、ここでいう正しい人間とは、権威に従うという者です。絶対服従するというのが、これが正しい人間の、これが立派な兵士のあり方です。たとえ上官の命令が間違っただけでも。まあもちろんケースバイケースという事は言うておきたいと思いますが、ただ 1 つの例としてサラは自分の夫を主と呼びました。アブラハムは妻のサラに「あなたは見目麗しい女だから、行く先々でいろんな権力者に目をつけられるだろう。そしてあなたをハーレムに召し抱えようとするだろう。その時に私が夫ということならば、その権力者は私を捕えて私を殺し、そしてあなたを手籠めにするだろう。私は捕まりたくない。私は殺されたくない、死にたくないから、だからその際にはあなたの兄だと言って私を助けてもらいたい。そして私を救うためにあなたは身代わりとなって、人身御供となって、手籠めにされてもらいたい。」何という夫でしょうか。とんでもない夫です。自分の命を救うために妻に犠牲になれ、と言うような夫です。従うべきでしょうか。サラは従ったんです。なぜ従ったんですか。それは、サラは夫を信じていたからではありません。サラは、夫の

さらに上にいる主を信じたんです。「私は正しい人でありたい。夫に従う事は、これは主の御心である。そして仮に夫が間違っている、主は正しい選択をしたこの私をきっと守って下さるに違いない。で、主はこの間違っただけを判断した夫をちゃんと正してくれるに違いない。夫を正すのは私の役割ではない。それは主の働きである。私は妻として、権威の下にある者として、ただ主のみこころに従うだけである。」主に信頼し、主が私を守って下さるといふその信仰を見倣うべきだと、**ペテロの手紙第一の 2 章**に書かれています。サラの信仰に皆さんは倣うべきであります。あなたの夫がたとえ間違っただけを判断しても、あなたは基本的には夫に従うべきであります。例外もあるという事はありますけれども、ただ基本的には従うべきであります。主に従うべきです。主に従うことが、あなたの肉の主人の言うことに従うことでもあるということです。キリストの兵士もそうであります。立派な兵士であれば必ず上司の命令に、上官の命令に、司令官の絶対命令に服従する者であります。たとえその司令官が間違っている、さらにその上に司令官がいるということも忘れてはいけません。

で、テキストに戻って頂いて **5 節『また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。』** 牧師は立派な兵士でもありますけれども、競技者・アスリートでもあるということです。パウロはよく競技の話をしていました。当時はオリンピックが非常に流行っていたわけです。今と同じです。スポーツが非常に流行っていた。ギリシャ人にしても、ローマ人にしても、スポーツが大好きだったわけです。競技が大好きだったんです。で、そこで人々にとって身近な競技を象徴として使って、ここでは競技をする時も規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることは出来ない。“栄冠”というのは“ステファノス”というギリシャ語で、あのステパノの名前の語源でもあります。今で言うメダルのことです。当時は月桂樹の葉っぱで作ったような栄冠はメダル代わりだったわけです。つまり金メダルを目指すわけですが、規定に従って、ルールに従って競技をしなければ、違反すれば、ドーピングをすれば、金メダルは獲得出来ても剥奪されてしまうということです。私たちにとっての規定・ルールとは、聖書の御言葉であります。この世で成功しても、聖書に反する成功の仕方ならば、それは神には認めてもらえないということです。規定に沿っていないので、ルール違反者ということで資格を失うわけです。栄冠、金メダルは剥奪されてしまうのであります。ですから牧師は、また神の働き人と言われる人たちは、皆この規定に従って競技をしなくてはなりません。で、私たちが目指すのは、この世の栄冠ではなくて、あの世の栄冠です。イエスキリストが「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と誉めて頂き、そしてそこで“**キリストの御座の裁き**”というオリンピックの表彰台に私たちは立つ時にしっかりとイエス・キリストから栄冠を頂けるように、これを目指して働くのであります。この世で認められるためじゃないんです。この世で賞賛を得るためじゃないんです。この世で栄冠を得るのではなくて、あの世で朽ちることのない冠を得るために、天で報われるために私たちは働くのであります。教会を大きくするのは有名になるため、教会を大きくするのはたくさんの献金を得るため、じゃないんです。すべてこの聖書というルールに従って、非聖書的な働きはやめなくてはなりません。たとえそれによって人が集まってもです。聖書から外れているけれども、でも一定の効果がある、教会は人で溢れている、盛り上がっている、非常にアクティブにそれが用いられていると思うかもしれませんが、でも聖書から外れたらアウトということです。

で、**6 節**に『**労苦した農夫こそ、まず第一に収穫の分け前にあずかるべきです。**』今度は牧師が、神の働き人が、労苦した農夫にたとえられています。まあ長野県民においては農夫というのは非常に身近な存在だと思います。農業やってる方もこの中におられると思いますので、良く分かると思います。農業というのは決して楽ではありません。だからなかなか若い人は跡を継ごうとしないわけです。都会に出て働いた方が楽だからです。まあそのような労苦する農夫の姿と、労苦する牧師の姿は、重なると言っているわけです。種を蒔けば、次の日に実が成るんじゃないんです。種を蒔いてもなかなか芽が出ません。雨が降らなければ、もちろん雑草も生えてきますから。雑草が生えて光が当たらなくなれば、これも大変です。

雑草も抜かなければいけない。除草作業も大変です。日差しも強いです。虫もつきます。雨が降らなければ、どこからか水を持ってこなくてははいけません。水を引いたり、水を運ぶ。大変な作業です。そして間引きをしたり、なかなかすぐに実りを期待することは出来ません。時間がかかるんです。種を蒔いたからといって、すぐに成果が得られるんじゃないんです。非常な労苦が問われるわけです。非常な時間が求められるわけです。忍耐が求められているわけです。箴言 24 章 30～34 節も参照したいと思います。『³⁰私は、なまけ者の畑と、思慮に欠けている者のぶどう畑のそばを、通った。³¹すると、いばらが一面に生え、いらくさが地面をおおい、その石垣はこわれていた。³²私はこれを見て、心に留め、これを見て、戒めを受けた。³³しばらく眠り、しばらくまどろみ、しばらく手をこまねいて、また休む。³⁴だから、あなたの貧しさは浮浪者のように、あなたの乏しさは横着者のようにやって来る。』すべての神の働き人は、勤労な労苦する農夫でなければはいけません。怠け者は使われないんです。農夫が怠けていたら、こうなってしまうと言っているんです。実りなど期待できません。とにかく時間がかかるということです。とにかく忍耐が必要ということです。そのためには私たちは忍耐強く労苦しながら、いつか実がなるその日を待ち望みながら、この忍耐は無駄にはならない、必ず精魂込めて、神経注いで、毎日畑に行って、毎日世話をするならば、必ず実が成ると。そのことを農家は信じて、毎日行うわけであります。まだ見ぬ実を夢見ながらです。ヤコブの 5 章 4 節も参照したいと思います。『見なさい。あなたがたの畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。そして、取り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。』ここでは“畑の刈り入れをした労働者”という言葉が出ていますけれども、世の終わりには必ず主が報いて下さるということが、ここでは示唆されています。この世では目に見える実りを、もしかしたら見られないかもしれません。でも、主は必ず報いて下さるということを信じて、あきらめてはいけません。投げ出してはいけません。すぐに目に見える成果が得られなくても、必ず主が報いて下さるということを信じて、努力をやめてはいけません。アブラハムも信仰の父と呼ばれていますが、ヘブル人への手紙の中で彼は約束のものを手に入れるために必要なのは、忍耐だということをお私たちに生涯を通して証ししてくれたということが書いてあります。忍耐の末に約束のものを手に入れる。農家と同じです。忍耐の末に実りを得るわけです。第 1 コリント 3 : 5～15 のところに、私たちが将来キリストの前に立った時に、キリストの御座の裁きを受けて、オリンピックの表彰台の上に立って報いを得る場面が記録されています。『⁵アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信仰にはいるために用いられたしもべであって、主がおのおのに授けられたとおりのことをしたのです。⁶私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。⁷それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。⁸植える者と水を注ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けるのです。⁹私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。¹⁰与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。¹¹というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。¹²もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、¹³各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。¹⁴もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。¹⁵もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。』まあ、ここでやはり農家の農作業のアナロジー（たとえ）とともに、それが将来必ず報われる、キリストの御座の裁きにおいて特にそのことが明らかにされるということが 11 節以降に書いてあります。金、銀、宝石、これらは火によっても焼かれずに残るものですが、一方で木、草、わら、で建てたものはすべて火によっては焼かれて灰になってしまう。

後に残らない、永遠に残らないものということになってしまいます。ですから、私たちは永遠に残るもののために汗水垂らして、労苦して働くのであります。木や草やわらのために汗水垂らしても、それはむなししいというわけです。むしろ、金、銀、宝石のように永遠に残るもののために私たちは労苦すべきであります。で、その労苦は必ず報われるということを知って頂きたいと思います。でも、その実を得るためには必ず労苦、忍耐は欠かせないということです。で、“分け前”という言葉も注目して頂きたいんですが、**第1コリント9章7節**。その労苦した農夫がまず第一の分け前にあずかるというところを『**いったい自分の費用で兵士になる者がいるでしょうか。自分でぶどう園を造りながら、その実を食べない者がいるでしょうか。羊の群れを飼いながら、その乳を飲まない者がいるでしょうか。**』飛んで**14節**『**同じように、主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活のささえを得るように定めておられます。**』それがひとつ分け前というものです。必ず神の働き人ならば、牧師ならば、教会から給料を得るということ、まあ謝儀とか呼び方はいろいろありますけれども、それは当たり前である、当然であるということです。但し、その働き人が労苦しているならばです。**第1テモテ**の方では、「**長老の中でもみことばを教えることに骨折っている長老は、二重の尊敬、二倍の尊敬を受けるに値するものだ**」と。二倍の報酬とも訳せる言葉だということを**第1テモテ**のところでは教えましたが、それは当然である、分け前に与るのは当然であると。で、それだけでなく、例えばみことばを教える際に、まずは教える者は自分自身が時間をかけて、労力をかけて、お金をかけて、その聖書のテキストを深く掘り下げ、学ばなくてはなりません。で、そこでたくさんの祝福を得るわけです。で、それを今度は教会員に分かち合うわけです。つまり、牧師は常に、最初に分け前に与っているわけです。まずは自分が教えて、そこでたくさんの恵みを得るわけです。ものすごい祝福を得て、感動して、そしてそれを今度は教会員に伝えるわけですから、これもいつも牧師のいわば役得というものです。まずははじめにみことばを教えるものが祝福を得る。そしてそれをまた分かち合うというその作業は農夫と同じであります。まず農家の人が精魂込めて作ったものを口にすることが出来るわけです。

で、次にテキストの**7節**に目を移してください。これも大切な言葉です。『**私が言っていることをよく考えなさい。主はすべてのことについて、理解する力をあなたに必ず与えてくださいます。**』聖書を学んでいる人ならば、この聖句をしっかりとマルでも付けるなり、線でも引くなり、心に明記して頂きたいと思います。『**私が言っていることをよく考えなさい。**』よく考えて頂きたいと思います。もちろんこれは“熟考する”とか、“黙想する”という言葉であります。その言葉と（“よく考えなさい”という言葉と）まあ作業とも言っても良いと思いますが、理解するということが連動しているというところ、そこに相関性があるということ、つながっているというところに是非着目して頂きたいと思います。よく考えることによって理解することが出来る。逆に、よく考えない人はいつまでも理解出来ないと言っているわけです。何べんも何べんもその聖句を黙想する、瞑想する、思い巡らす。牛が7つの胃袋を持っていますが、それを何べんも何べんも草をはんでは、胃の中に入れて、そしてまた吐き出してはまたそれを何べんも何べんも反芻して自分のものにするように。何回も何回も読む。何回も何回も聞く。そうすることで初めて理解出来るわけです。よく、私は牧師ですから言われます。「全然あなたの言ってることが分かりません。理解出来ません。自分で聖書を読んでいるんですけども、全然理解出来ません。あなたの言っていることが全然分からないんです。」是非そういうあなたに。あなたはその聖書箇所をよく考えたことがありますか。よく考えたことがあるならば、必ず理解できます。じっくり、ゆっくり、時間をかけて何べんも何べんも読むんです。反芻するんです。瞑想するんです。黙想するんです。そうすることで理解が得られるということ。必ず与えられると書いてあります。やってみて下さい。理解出来ないと思ったら、よく考えることをまずはやってみて下さい。よく考えもしないで、私たちは理解出来ませんと言います。今私がお話してきたこと一つ一つよく考えてみて下さい。そうすれば必ず理解出来るようになります。

で、8節に『私の福音に言うとおりに、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。』これも大切な聖句です。“ダビデの子孫”ということは、イエス・キリストは100%人間であるということ。でも、その一方で彼は死者の中からよみがえった方。これは人間ではないということです。神ということです。100%人間であり、100%神である。それが私たちの救い主、イエス・キリストであります。このイエス・キリストのことを“たまに思いなさい”ではなくて、“いつも思っていなさい”と、これも命令です。なぜ命令されるのか。それはいつも私たちが忘れるからです。私を覚えてこれを行いなさい。聖餐式の制定にこの言葉が見られます。忘れるから命令されているんです。いつも思っている者ならば、命令される必要は無いわけです。牧師が行き詰まる時、それはイエス・キリストを忘れる時です。神の働き人が萎えてしまう時、もうこれ以上続けられませんかと思う時、落ち込んでしまってやる気を失ってしまう時、その時あなたは忘れていました。イエス・キリストことをすっかり忘れてしまっています。兵士も忘れるんです。競技者も忘れるんです。農夫も忘れてしまうことがあるんです。だから聖餐式が制定されたんです。これを教会で行なうようにと。何のために教会に行くのかもハッキリしています。聖餐式を通してイエス・キリストを覚えるためです。だから「私は別に教会に行かなくてもいいです。一匹狼でやっていきます。」兵士1人で何が出来ますか。敗残兵になるだけです。競技者もひとりでは何もできません。トレーニングも誰かに助けてもらわないといけないわけです。農夫もそうです。ひとりで農家が出来ますか。無理ですね、必ず協力者が必要です。兵士にしても、競技者にしても、農夫にしても、ワンマンという事は無いわけです。少なくともイエス・キリストがともにいる事を忘れてはいけません。あなたは1人ではありません。いつもイエスのことを思って下さい。そこにイエスがいるんです。あなたと一緒にいるんです。孤立無縁、孤軍奮闘ということはないんです。イエスがあなたとともにおられます。聖餐式は私たちにとっては最も大切なセレモニーであります。ただパンと杯を飲み食いする宗教儀式だと思っただけではなりません。これを行なうために教会に集うということも私たちは意識しなくてはなりません。教会に行かなくてもいいと。「1人でも聖餐式をできる。」とあなたは言うかもしれませんがイエスは弟子たちと共に聖餐式を守ったわけですから。個別に食事をしたんじゃないわけですから。弟子たちと共に、神の家族と共に、一緒に聖餐式を守ったわけですから。兵士も、競技者も、農夫も皆一緒に働くものです。

で、9節。『私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことは、つながれてはいません。』今パウロはローマの獄中にいますけれども、鎖でつながれているわけですが、でも神の言葉はつながれてはいないということ。現にこの手紙はつながれていないわけです。獄中のパウロの下からエペソのテモテの元へこの神の言葉が送られたわけですから。神の言葉は決してつながれません。今あなたは自分がつながれているように、鎖でつながれているように思っているのでしょうか。何かにかんじがらめにされて、抜け出せないと思ってるのでしょうか。「だから私は何も出来ない。」あきらめていないのでしょうか。神の言葉はつながれていないんです。いろんな制約があり、いろんな限界があるかもしれませんが、神の言葉には何の制約も何の限界もありません。1章12節のところ『そのために、私はこのような苦しみにも会っています。』そのために苦しみに遭う。福音のために苦しみに遭う。パウロは2度同じことを言っています。神の働き、ミニストリーにはやはり苦しみは欠かせないものです。この世にあたっては患難があること。これは私たちの主イエス・キリストが弟子たちに約束されていることでもあります。でも、苦しみがあるけれどもあなた方は世に打ち勝っているんだということ、勝利者であるということ覚えなくてはならない者であります。ですから私たちは繋がれているとついつい敗北感に浸ってしまうかもしれません。窮屈で、かんじがらめで、何も出来ない、そう思ってるかもしれません。しかし神の言葉は生きていて力があります。ですからこの神の言葉に信頼を置いて、そして自分に出来る事、それはこの神の言葉を使って多くの者を励ましたり、また自分はこれで死んでしまうけれども、でもテモ

テにこの言葉が伝わるのならば、テモテが私のスピリットを受け継いで、テモテが代わりに働いてくれる。パウロは悲観的になることはなかったわけです。そのようにして皆さんも今の自分の事情が、現状がどうであれ、神の言葉はつながっていないということ。だから諦めずに皆さんも忠実に働いて頂きたいと思えます。

で、10節には『ですから、私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです。』“すべてのことを耐え忍びます”と、同じことがずっと繰り返されています。労苦とか、忍耐とか、苦しみとか、耐え忍ぶとか、こういう言葉が常にミニストリーにはつきものなということです。何度も何度もパウロが言ってるんですけども、これも忘れないでください。決して楽ではないということです。なかなか人が救われない、なかなか人が教会に来てくれない、福音を述べ伝えているのに、こんなにも努力してるのに報われない、実がならない。でも、私たちはやめてはいけない、あきらめてはいけない、失望してはいけないということが、パウロの口を通して語られていることにしっかりと耳を傾けて頂きたいと思えます。苦しみを受けるのは当然である。忍耐するのも当然である。

で、11節のところには『次のことばは信頼すべきことばです。「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。」この“信頼すべきことば”という言い回しは第1テモテ1:15（『「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。』）ならびに第1テモテ4:9（『このことばは、真実であり、そのまま受け入れるに値することばです。』）にも見られる言い回しです。その前後も読んで頂きたいですが、第1テモテ4:10には『私たちはそのために労し、また苦心しているのです。それは、すべての人々、ことに信じる人々の救い主である、生ける神に望みを置いているからです。』と。繰り返し繰り返しパウロはテモテに対して、「これは信頼すべきことばである。そのまま信じ受け入れるに値する言葉だ。」と遺言として語っているわけです。で、第2テモテ2:11ではどういう言葉かと言いますと『もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。』私たちクリスチャンは皆、彼とともに、イエスとともに死ぬものであります。ともに殉死する、殉教する、殉職する者であると言っているわけです。ルカの福音書9:23以降です。イエスの言葉を見て頂きたいと思えます。『²³イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。（だれでもイエスについて来たいならば、自分を捨て、日々、毎日自分の十字架を負い、そしてイエスについて行く。これがキリストの弟子であるということです。）²⁴自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。』逆説、パラドックスがここに描かれています。でも、この言葉は“信頼すべきことばである”と、パウロは言ってるわけです。『もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。』これはイエス・キリストの言われた言葉でありますから、信頼すべきことばです。なかなか信頼しようとしなれないのは私たちです。「自分に死んだら、自分が無くなったら、どうなるんですか。怖いんです。」自己否定だとか、あまり聞こえが良くない言葉です。「そんなことしたら、どうなってしまうんですか。自分を失うなんて、怖いんです。」まあ、ここでこれがイエス・キリストが言われる言葉だということをもう一度確かめ、受け止めて頂きたいと思えます。イエスは口先だけの方ではありません。弟子たちに命じられた事は、ことごとく先んじて実践された方、実証された方であります。自分を捨て、自分の十字架を負っていくというのはどういうことなのか。それはどういう生き様になるのか。イエス・キリストが身をもって示されたわけです。ですから、私たちは信頼できるわけです。つまりこれはイエス・キリストのライフスタイルということです。イエスの生き方を見れば、私たちはそうなりたい、そうあるべきである、これが本来の姿、これが正しい人の歩みであるということに納得がいくわけであります。ですから、司令官の命令として私たちは絶対服従

することが出来るわけです。納得出来なくてもです。理解出来なくてもです。自分を捨てて、自分の十字架を負う人生とは、こういう人生だと。目の前に上官が、その模範を命をもって、命を落としてまでも表してくれたので、私もそうありたいし、それに続きたいと、そう思うわけです。自分に死ねば死ぬほど、逆に生きようになる、生き生きとしてくると言っているわけです。自分を捨て切れない人は、いつまでも自分にしがみついている人は、自分に未練ダラダラの人は、不自由です、窮屈です。まあ、ありとあらゆる問題・悩みを今皆さん心の中に、頭の中に思い描いて頂きたいと思います。とどのつまりところ、結局は、問題は自分なんです。言い換えれば自我です。その自我さえなければ、それは問題ではないわけです。でもそこに自我があるから、自分があるから問題になってしまうわけです。自分を捨てて、自分の十字架を負っている限りは、そのことは問題にはならないはずなんです。「いや、あの人の言っていることが問題なんです。あの人のやったことが問題なんです。」そうでしょうか。そこに自分を含めなければ問題じゃないわけです。問題は問題でなくなってしまうわけです。で、あなたはもう恨みつらみから解放されるんです。もうあなたは、あの人の言ったこと・やったことにいつまでもとらわれずに、いつまでも苦々しい思いを持たずに、いつまでも怒らずに、縛られずに、許せない思いでがんじがらめに鎖に繋がれることなく、解放されていくわけであります。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23 : 34) と。解放されたものでなければ、祈れない祈りです。恨みつらみや、自分を痛めつけ、辱め、^{はりつけ}磔にしたような者たちのことを恨んでいる限り、怒っている限り、憎んでいる限りは、そのような大胆な祈りを捧げる事は出来ないはずなんです。でも、人はそのイエスの十字架上のとりなしの祈りに出会って感動するんです。自分が求めていたものはこれだと。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」こんな祈りを私も捧げてみたいし、こんな自由な人に私も変えられたい。自分を捨て切れない人は、自分を十字架に磔にしない人は、いつも何かにとらわれています。ですから、いつまでも自由になれないわけです。いつまでも窮屈な生き方しか出来ません。生き生きとしていないわけです。自分に死ねば死ぬほど、生き生きしてくる。そのことをC・S・ルイスはこう言っています。「私たちが自己というものを除去して、キリストに自己を支配してもらえばもらうほど私たちはますます本当の自分になることができる。」また、C・S・ルイスの師匠と言われているジョージ・マグドナルドの言葉も紹介します。「キリストは私たちを救うために死んで下さった。苦しみからではなく、私たち自身から。不正からではなく、ましては正義からでもなく、私たち自身が正しからざるものであるということから。」また、ジョージ・マグドナルドはこうも言っています。「私たちは日ごとに死ぬ。死んで日毎に甦る人は幸いである。」端的に言えば、キリスト教の救いは自己からの、自分からの救いだと言っているわけです。自我からの解放です。また、A・W・トーマーもこう言っています。「自己否定という事は、個人的苦痛や苦行を課することでは無い。自己否定とは、自分のために生活するという原則を断念することである。私たちの存在と意思の方向を完全に換え、もはや自分にどのような影響があるかを基準に行動するのではなく、神と他の人々にどのような影響を及ぼすかという一事に思いを寄せるようにさせるものである。」アメンと言いたいと思います。自己否定という言葉のイメージは、何か苦行や修行をすることのように思うかもしれませんが。針のむしろの上に座るような、そんなイメージを持つかもしれませんが、しかし実際のところ自己否定というのは、自分のために生活するという原則を捨て去るということです。私たちはかつて全て自分中心ですから、全部自分にとってどうなのかということをもとにして判断してきたわけです。このことは自分にとってどうなるのか、どういう影響を及ぼすのか、メリットがあるのか、デメリットがあるのか。でも、そうではなくて神と他の人々にどのような影響を及ぼすのか。それが自分を捨て、自分の十字架を負ってイエスについてくるクリスチャンのメンタリティーというものであります。ジョン・ニュートンは、十字架のことを、日々避けたいと思うすべての出来事、これが十字架であると。私たちは自分を失いたくないので、自分を否定したくないので、自分を捨てたくないで、いつまでも自分に

しがみついていたので、ついついいろんなものを避けようとしてます。でも、一切自分へのこだわりを捨ててしまうならば、私たちはイエスと同じように解放された者となるわけです。自分がどう思うかではなくて、神がどう思われるか。また、トーマスはこうも言っています。「**神のために成そうと願えば、まず自己に死ななければならない。そして、自己に死んで後、私は初めて神において生きる。**」その通りです。私たちがイエスの言葉も、パウロの言葉も、信頼すべき言葉として額面通り受け止めて、これに倣う物でありたいと思います。自分に死ぬということ、自分の十字架を負うということ。世間が言う“自分の十字架を負う”とは全く違った意味だということも忘れないで下さい。世間が言う“自分の十字架を負う”というのは、例えば「私のこの癌は自分の十字架です。私はこの癌を一生背負って生きていきます。この糖尿病は私の十字架です。」とか、そういう使い方は間違っています。「私は夫に捨てられ離婚しました。これが私の十字架です。」ではないんです、十字架ではないんです。十字架というのは、自分のためのものではありません。十字架というのは、イエスと同じ十字架ですから、他者を贖うために自ら進んで背負うものことであります。他者を贖う、救うために、他者の益となるために、自ら進んで犠牲を払うという事。これが自分の十字架という意味です。自分のための十字架じゃないんです。あくまでこれは人のため、人を救うため、神の栄光のための十字架です。ですから、誰かを贖うためには、自分の好きな事をやめることも必要なわけです。誰かを贖うために、救うために、祝福をもたらすために、好きなテレビの番組を見ないとか。これもひとつの十字架を背負うという意味です。日々です、瞬間瞬間。ですから、毎日私たちはそのために生きていることを覚えなくてははいけません。誰かを贖うために時にはこのことを後にして、このことを脇において、このことを犠牲にして、あのことをやめて、捨てて。そこまでして犠牲を払ってその人のために尽くす。贖うために、救うために、その人の益になるために、その人の徳を高めるために。それがクリスチャンのライフスタイルというものであります。そうやって日々選ぶんです。自分を生かそうとするんじゃないでなくて、人を生かそうとするわけです。自分の栄光のためにではなくて、神の栄光のために。でも、死ぬことによって命が見出せるわけです。苦しむことによって、栄光を受けるわけです。英語では“no pain, no gain”という言葉があります。痛みがなければ得るものもないわけです。”no cross, no crown”十字架なければ、栄冠もない。このパラドックスは、信頼すべき言葉です。この逆説は、信頼すべき言葉であります。内村鑑三の言葉も併せて紹介します。「**信・信仰・信頼。人がなし得る最大の事業は、自己を忘れ、自己に死に、神を信じ、神により頼みて生きることなり。負けて勝ち、踏みつけられて立ち、殺されて生きるのが、キリスト信者の生涯である。**」全て逆説です。この世は自分を信じること、自分の能力や自分の力に頼って、そして最後には自分をほめること、これがこの世のメンタリティーです。自分を生かそうとするわけです。でも、聖書のキリスト内に見られるメンタリティーは、そうじゃありません。自分を信じるのではなくて、神を信じること。自分に依存するのではなくて、神に依存するということ。また、逆に自分を否定し殺すことによって、キリストの命がそこから生き生きと現される。それが私たちクリスチャンのあり方であります。**ガラテヤ 2:20**の言葉が正にそのことを言っています。『私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に（肉にあって）生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。』

で、テキストに戻って下さい。第2テモテ 2:12『もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちに否まれる。』死はいのちに、苦しみは栄光に繋がります。自分を捨て切れない人は、神には決して用いられることはありません。12節の終わりに『もし彼を（イエスを）否んだなら、彼もまた私たちに否まれる。』とありますけども、ペテロことを思い起こして下さい。ペテロは公の場でイエスを知らない、イエスとは何の関係もない、イエスを否んだわけです。関係ないと自分に呪いをかけて断言してしまったわけです。公の場で公言してしまったわけです。しかし、イエス

はそんなペテロを否んだでしょうか。その逆です。逆にイエスは三度「あなた私を愛するか。」と質問して下さり、そしてその都度「私の羊を飼いなさい。私は子羊を養いなさい」と、むしろ牧会者としてイエスはペテロを召し上げて下さったわけです。ペテロはイエスを否んだんですが、イエスはペテロを否むことはしませんでした。ですから、ここでの『もし彼を否んだなら、彼もまた私たちに否まれる。』という意味というのは、ペテロのケースとは違うということです。むしろここではイエス・キリストを自分の主として否むということです。救い主として信じない、拒絶する。イエスだけが私たちに罪から救うことの出来るただひとりの、唯一の救い主なんです。そのイエスを否む、拒む、認めずに拒否するならば、残念ながらその人はイエスによって認めて頂けない。イエスを否定する者を、無理やり天国に入れるということとはされないということです。もちろん、神はひとりとして滅びることを望んでいません。すべての人が悔い改めに進んで、救われることを望んでおられるのが神のみこころ、ハートであります。事実イエスも十字架の上で「父よ。彼らをお赦してください。」とまで祈っておられるわけです。にも関わらず、私たちがそれを突っぱねるならば、残念ながらそこにはもう救いは与えられないということです。それは自らの選択によって、神からすれば不本意なことですけども、人間の自由意志を尊重される神が認めるところであります。『もし彼を否んだなら、彼もまた私たちに否まれる。』

しかし、13節に『私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。』これも重要な聖句です。私たちは真実でなくても、誠実でなくても、忠実でなくても、イエス・キリストは常に真実、誠実、忠実なお方です。ホセア 6:4には『エフライムよ。わたしはあなたに何をしようか。ユダよ。わたしはあなたに何をしようか。あなたがたの誠実は朝もやのようだ。朝早く消え去る露のようだ。』“私たちの誠実は朝もやのようだ”と表現されています。朝もやのようにすぐに消えてしまうものだという表現です。今は、一時は、誠実に、忠実に、私たちはイエスに従おうとするかもしれませんが、もう次の瞬間、この時間は神に対して忠実にあろうとするかもしれませんが、家に帰って見たらどうでしょうか。目の前の夫に対してどうでしょうか。私たちはいい加減な者であります。しかし、イエス・キリストは私たちとは違うということを知って、このイエスに立ち返って頂きたいと思います。第1ヨハネ 1:9にこう書いてあります。『もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で（誠実で、忠実で）正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちにきよめてくださいます。』基本的には私たちはすべて真実で、誠実で、忠実な者でなければいけません。しかし神は私たちをご存知です。私たちは、弱く、もろく、ペテロと同じようにすぐにイエスを自分の都合によって忘れて捨て去ろうとする者であります。しかし、神は私たちとは違って、幸いに変わらない真実な方であります。この方に自分の罪を言い表わすなら、必ずあなたの罪を赦して下さい。すべての悪からきよめてくださいます。ですから、テモテがおくびょうの霊に駆られて、つつい不真実、不忠実な者になってしまったとしても、この変わらない真実な方に立ち返るならば、必ずセカンドチャンスが与えられ、必ずやり直しをさせてもらえる。信頼すべき方だから、常にこの方に立ち返るように。私たちも自分の誠実さを見るならば、自分の忠実さ、自分の真実さを見るならば、つまずくと思います。あの時誓ったのに、イエスを主と信じて、イエスにつき従いますと決心したのに、覚悟したのに、公言したのに。でも、次の瞬間、数日経ってから、数週間経ってから、数ヶ月経ってから、イエスを捨ててしまう。イエスを主とせず、自分を主としたり、他のものを主としてしまう。そういう自分にショックを受けることもあるでしょうし、そういう自分がかっかりすることもあると思います。自分はクリスチャンとして落第だ、負け犬だと、情けない、不甲斐無い。そういう自分に目を留めている限りは、あなた何も出来なくなってしまいます。でも、是非イエス・キリストに目を向けて、このイエス・キリストから目を離さないで頂きたいと思います。彼は常に真実であります。昨日も、今日も、いつまでも同じ方です。あなたが変わってしまったとしても、イエスはあなたに応じて変わる方ではありません。あなたが何をしようと、何を言おうと、この方に影響を与える事は

1 つもありません。有り難いですね。嬉しいです。そんな方に私たちはお仕え出来ること、本当に幸いなことであり、特権であります。だからこそ私たちはこの方の言うことに絶対服従するのであります。

14 節に『これらのことを人々に思い出させなさい。(今私が皆さんにやってることです。)そして何の益にもならず、聞いている人々を滅ぼすことになるような、ことばについての論争などしないように、神の御前できびしく命じなさい。』何の益にもならない、人の徳を建て上げない、永遠に価値のない、役に立たないもの、聞いている人々をむしろ滅ぼすことになるようなもの。そういうくだらないことについて論争してはいけない。それは時間の無駄である、空費であると、パウロは言っています。ですから、ここで言う“ことば”というのは、もちろん“神のことば”ではありません。これは“神のことば”から外れた、“人間のことば”・“人間の教え”・“人間の教理”であります。違ったことを教える異端教師たちが、エペソ教会の中に入り込んできたわけです。彼らは聖書に反することを教え、何の益にもならない、聞いている人々を逆に滅ぼすようなことを説いているわけです。まあ、そういう異端の者たちと無駄な議論をしてはいけないと言っているわけです。そんな時間はないと。そんな暇はないと言ってるわけです。

で、15 節で『あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。』これも重要な言葉です。どれもこれも重要です。まあ、遺言ですから当然です。一言一言に重みがあります。ここでは、働き人というのが牧師の姿であります。労働者の姿。“まっすぐに説き明かす”と言うのは、「まっすぐに切る」というのが直訳です。曲がって切らない。聖書を正確に分析するということです。曲解しないということです。これが神の働き人に求められていることです。正確さです。間違ったことを教えてはいけません。聖書から外れたようなことを教えてはいけません。そのために牧師は全身全霊を込めてフルタイムでライフワークとして、天職としてみことばと取り組まなければいけないわけです。だから日常生活のことに掛かり合っているという暇がほとんどないわけです。なるべくだったら皆さんの教会の牧師が、日常生活のことに掛かり合わなくてもいいように、フルタイムで聖書を学び、牧師がそこからたくさんの祝福を得て、それが教会員に還元される。そのために経済的に牧師の家庭を支えること、それは皆さんにとっても益となるはずですが、それをせずに、それぞれが自分たちの生活のために切り詰めることもせずに、自分たちの生活を優先して、老後のためにとか、家族のためにということで、牧師の生活に何ら関心を払わないでいるならば、残念ながら牧師はそれではフルタイムでこのことをために努め励むことを出来ないわけです。生活のために外で働いて、そのために時間を使う必要もでてきてしまうわけです。これは理想であります。現実はいつもこの理想通りではないかも知れませんが、ここを目指さない限りは、教会は何も変わらない、成長出来ないということです。第 2 テモテ 2 : 15 はもちろん牧師にのみ当てはまる言葉ではありません。これはクリスチャン全員に当てはまる言葉です。バイブル・カレッジの生徒にだけ当てはまる言葉ではありません。すべてのクリスチャンに当てはまる言葉です。私たちもいつかは熟練した熟練工にならなくては行けないのです。神のみことばを取り扱う上では、熟練した者、まっすぐに切って(ちょうど大工さんがまっすぐに木を切って、カンナをかけて、ぶれないように、曲がらないように、ピッタリその柱なりがフィットするように、建物を支えるために崩れないように)、そういうみことばをピッタリ当てはめられように、熟練した者になるように努め励まなくてはならないわけです。で、そのために時間を惜しんでもいけませんし、そのためには他の作業よりももっと多くの時間を費やす必要があります。幸い皆さんは今そのことをここで出来ているので、言われるまでもないことかもしれません。熟練した者を目指そう。そして真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人になれるように。「それは聖書のどこに書いてあるんですか。」「ここに書いてあります。」と言える人。「このことについてどうしたらいいですか。」「まず聖書を開いて見ましょう。聖書が何と言っているのか、一緒に開いて見ましょう。ここに書いてあります。」そのようにして私たちも自分を神に捧げるように、みことばを学ぶことに対して私たちは献身者

でなければならないということです。で、とりわけみことばを取り継ぐ牧師は、みことばを教えるためには、みことばを学ぶという膨大な作業が必要なので、そのために教会員の皆さんも協力して、祈って、そしてその生活を支えなければいけません。「牧師は単に日曜日に1回説教すればいいなんて、そんな楽な仕事はない。」と思うかもしれません。この教会は日曜だけではないですけれども、ただ多くの教会では日曜日20分とか15分の説教するのが牧師の働きのハイライトであり、本当にそのことが牧師にとってプレッシャーで、もうその準備が非常に苦勞であると。たかだか15分20分のメッセージをするためにもうプレッシャーで、胃がキリキリするぐらい大変なんだと、多くの牧師たちがそう言います。じゃあ、2時間教えるとはどういうことなのかと、皆さん思うかもしれませんが、神の恵みによって強くされなければ、確かにそれは出来ないことだと思います。ですから皆さんも是非牧師のためにも祈って頂きたいと思ひますし、また皆さんも委ねられたものをしっかりと受けて、それを分かち合えるようにこれまで以上にますます励んで頂きたいと思ひます。それとは対照的に偽教師たちは**第2コリント4:2**でこのように言われております。『**恥ずべき隠された事を捨て、悪巧みに歩まず、神のことばを曲げず、真理を明らかにし、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。**』偽教師という者たちは、聖書から外れた異端的な教えを説く者たちは、その逆なんです。恥ずべき事柄を捨てないわけです。悪巧みに歩んでいるんです。神のことばを曲げてしまっているんです。で、真理を不明瞭にしてしまっています。で、“神の御前で”じゃなくて、“人の前で”自分自身を立派な教師として推薦しているわけです。また、**第2テモテ4:3~4節**。『³というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願ひをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、⁴真理から耳をそむけ、空想話にそれで行くような時代になるからです。』偽教師たちは、真理のみことばをまっすぐに説き明かす事はしません。常に曲げて説いて、人々の耳に心地の良いもの、都合の良いことを言うてもらうように、聞きたいようなメッセージをするために真理を平気で曲げるような、不明瞭にするような、そういうティーチングをするわけです。まっすぐに切られる。これはみことばによって切られるということも含めて考えて頂きたいと思ひます。まっすぐに切られたみことばは、私たちをまっすぐに切るものであります。曲げられたみことばは、私たちを曲げられたように切ってしまいます。ですから、正確なみことばは私たちを正確な歩みに導きますけれども、不正確なみことばは私たちを不正確な歩みに導いてしまう。大変これは恐ろしいことでもあります。みことばによってその人の運命を変えてしまう、永遠を左右してしまうものですから、細心の注意が必要です。それだけのみことばを1時間2時間読んだだけで、学んだだけで説けるようになるかと言ったら、そうじゃないはずなんです。マハトマ・ガンジーはこう言っています。「明日死ぬつもりで生きる。永遠に生きるつもりで学べ。」と。“永遠に生きるつもりで学べ”とされていますが、そのようにして私たちは永遠のために学ぶということをしなければいけません。

で、次に**16節**『¹⁶俗悪なむだ話を避けなさい。人々はそれによってますます不敬虔に深入りし、¹⁷彼らの話は癌のように広がるのです。ヒメナオとピレトはその仲間です。』**17節**までお読みしました。俗悪なむだ話。これももちろん聖書から外れた、真理が曲げられた話だということなんですけども、まあそれが俗悪なむだ話かどうか見分ける方法は簡単です。その話が、若しくはその教え・教理があなたを敬虔に導くならば、それは真理です。でも、不敬虔に導くならば、それは俗悪なむだ話ですから、もうそんなものに耳を貸す必要はありません。その話が、その教えが、その教理が、ますますあなたをキリストのように変えるならば、それは真理です。でも、そうでないならば、それは真理ではありません。偽りであります。で、それはただの俗悪なむだ話ですから、もうそんなくだらない話に耳を貸してはいけないということです。簡単な見分け方です。ですから、もし私の語ってることが、皆さん一人一人をイエス・キリストの似姿に変えていくような結果を生み出していないならば、逆に皆さんがますますキリストから離れ、ますます不敬虔に深入りしているならば、私の説いていることは俗悪なむだ話です。ですから、簡単に見分ける

ことが出来ると思います。

で、17節。『彼らの話は癌のように広がる。』とありますから、放っておいたらこの俗悪なむだ話は広がって行って、さらに悪化させてしまうということです。癌と同じですから、早期発見、早期治療が相応しいわけです。望ましいわけです。みことばのメスを入れる必要があります。がん細胞を切除する必要があります。放っておいたら、深刻化してしまいます。ですから時折私たちはこの俗悪なむだ話を聞きながらも、放っておいてしまうことがあると思います。聖書はこう言っているのに、彼らは違ったことを言っている。それは俗悪なむだ話だと、あなたは思っているんですけども、敢えて何も言いません。何も触れません、黙っています。でも、それは癌のように広がってしまうということを知って頂きたいと思います。でも、もし何かあなたがみことばによってそれを否定するなら、「あなたは私をさばいている。」と言われてしまう。人間関係を失ってしまうかもしれない。愛がないと言われてしまかもしれない。まあいろんなことを恐れて、あなたは黙るかもしれません。不問に付そうとするかもしれません。でも、それは癌のように広がるということ。本当にその人のことを愛しているならば、あなたは早期発見、早期治療と言う事を思い出して、是非みことばのメスを入れてあげて頂きたいと思います。もちろん真理は愛をもって語らなくてははいけません。エペソ 4:15にも「愛を持って真理を語りなさい。」と言われていています。ですから、私たちもそのようにして愛を持って真理を語って、愛しているからこそ真理のみことばを語り、この癌を早めに切除する、もう手遅れになる前に。これが、愛がある者の行為であります。ヒメナオとピレトという実名も挙げられています、ヒメナオに関しては第1テモテ 1:20にも挙げられていました。2回目の登場です。ピレトに関しては他には言及がないんですけども、ただ第2テモテ 1:15にもフゲロとヘルモゲネという2人の実名が挙げられています、彼らは違った教えをエペソ教会に持ち込んだ異端教師として有名な人物だったわけです。彼らの名前をパウロは挙げて、そして注意するように、彼らの教えに惑わされないように、影響を受けないように、具体的にその教えの内容だけではなくて、その教えを説いている者の名前も挙げていく。でも、それは裁くことではないと言うことです。実際に体が病気になった時、やっぱり医者は病名というものをハッキリと告げるわけです。癌でもいろんな癌があるわけです。腫瘍も悪性のものもあれば、良性のものもあるわけです。何の癌なのか、何の病気なのか、明確に告げる必要があるわけです。で、それを切除するという、これも断行しなくてはいけないことです。病名をハッキリ言ったら傷つくかもしれないからとか、何の癌かということハッキリ言ったらショックを受けるかもしれないから、だから伏せておこう。それは決して愛のあることではないわけです。

で、18節で『彼らは真理からはずれてしまい、復活がすでに起こったと言って、ある人々の信仰をくつがえしているのです。』もうすでに復活は起こってしまったというのは、これはイエス・キリストが甦られたこと、それは肉体的・身体的な復活ではなくて、目に見えない霊的な復活であったと。それを否定するようなことを彼らは説いていたわけです。第1コリント 15:12以降も後で参照して頂きたいと思います。そこによれば、肉体的な復活というのは、キリスト教信仰の土台であるということ、最重要な教理であるということが言われています。少しだけ読みますから聞いて下さい。『¹²ところで、キリストは死者の中から復活された、と宣べ伝えられているのなら、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はない、と言っている人がいるのですか。¹³もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。¹⁴そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。¹⁷そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。¹⁹もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。』このようにイエス・キリストの文字どおりの身体的・肉体的復活を否定する者は、彼らは「キリストは復活しなかった。」とも言いますし、「霊的に復活しただけである。キリストの復活はただの象徴である。」と。そう主張

する者たちは、キリスト教信仰の実質を、本質と言うものを完全に否定する者だと。キリストの復活こそ、キリスト教信仰の土台であります。文字通り私たちはこのことを捉え、信じています。でも、中には「キリストの復活はなかった。」とか、若しくは「キリスト復活はただの寓話である。これは靈的に捉えるだけの象徴であると。死者が復活するはずなどないと。」そのように説く者があります。残念ながら今日もそういうことを教える教会があります。日本基督教団というところでもそう言っています。ただ、日本基督教団の公式な信仰告白の中では、イエス・キリストの復活はもちろん謳っています。使徒信条の中にもキリストの甦りについてはハッキリと明記され、それを朗唱しています。にもかかわらず、教団の中の一部の牧師たちはあからさまにキリストの復活を否定します。キリスト復活を否定するような牧師が一部あるということ、このことも敢えて名前を挙げましたけれども、皆さんもそれを聞いた時には今後驚かないで下さい。日本のプロテスタントの最大のグループの日本基督教団の中の一部の牧師たちはイエス・キリストの復活を否定しているんです。処女降誕も否定しています。キリストの行なわれた奇跡も全部否定して、イエスが戻って来られる再臨も否定しております。「じゃ、何を信じているんですか。」何も信じていないと思います。それは最早キリスト教ではないとすら私は言いたいと思います。同性愛もあり、なんでもありです。

で、ここでもう一度話を戻したいと思いますが、文字通りの復活は無い。で、死者の復活は無いという事は、聖書によれば死者は携挙の際に朽ちることのない栄光の体を頂く。そして生きている者が携挙された時は、それに続いてまた朽ちることのないキリストと同じ姿に変えられる。その復活のことも信じないわけです。「携挙なんか信じない。馬鹿らしい。そんなものを信じるのはキリスト教原理主義者だけだ。今時、聖書を文字どおり信じるなんて、それは狂信的である。あまりにも偏っている。」そういうことを言う人たちが今もいます。彼らは、ヒメナオとピレトであります。ハッキリと聖書は名前も挙げていますので、私達も怯んではいけません。『**彼らは真理からはずれてしまい、復活がすでに起こったと言って、**』「キリストは靈的に戻って来られる。」エホバの証人はそう言います。「1914年にキリストはもう靈的に戻って来られたんだ。」と。それは真理から外れているわけです。『**ある人々の信仰をくつつがえしている。**』恐ろしい働きであります。

で、**19節**には『**それにもかかわらず、**（この、“それにもかかわらず”という言葉は非常に重要です。それにもかかわらず。誰が何と言おうと、日本基督教団の牧師が何と言おうと、エホバの証人が何と言おうと、誰それが何と言おうと、有名なヒメナオとピレトが何と教えようと、それにもかかわらず）**神の不動の礎は堅く置かれていて、それに次のような銘が刻まれています。**「主はご自分に属する者を知っておられる。」また、「**主の御名を呼ぶ者は、だれでも不義を離れよ。**」』“それにもかかわらず”、この言葉をいつも皆さんも意識してください。異端的な教えが教会の中に蔓延してきても、**それにもかかわらず**、有名な誰某先生が何と言おうとも、**それにもかかわらず**、神の不動の礎は堅く置かれているということです。で、ここで「主はご自分に属する者を知っておられる。」という言葉は実は**民数記 16章 5節**からの引用です。そこでモーセに対して反旗を翻す者たちが現れます。**5節**が引用箇所なんですけども『**それから、コラとそのすべての仲間とに告げて言った。**「あしたの朝、主は、だれがご自分のものか（誰が主に属するものかという、この箇所が引用となっています。）、だれが聖なるものかをお示しになり、その者をご自分に近づけられる。主は、ご自分が選ぶ者をご自分に近づけられるのだ。」コラを中心としたモーセとアロンに反旗を翻した反抗分子たち、彼らは結果的には神の立てられたモーセとアロンの権威に逆らったが故に、神の裁きを受けて穴に飲み込まれるということになるわけです。ですから、ヒメナオとピレトも正にコラたちと同じように、パウロとかテモテの権威に逆らったわけです。聖書に書いていないようなことも説いて、神の立てられた権威を否定したわけです。反旗を翻したわけです。でも、神は誰が主に属するのかわかっています。誰が主に属さないのかわかっています。ですから、放っておけば彼らは間違いなく穴に飲み込まれ

るわけです。穴に落ちて神に裁かれるのは必定であります。まあ、私もそのように“それにもかかわらず”という言葉がいつも心に留めて、有名な人が何を教えようと、何を説こうと、彼らの方が大きなグループだろうと、大きな教会だろうと、関係なく私たちは、「神は誰がご自分に属しているのか知っておられる。」だから、たとえあなたがマイナーでも、少数でも、彼らが多数でも、マジョリティでも、メジャーでも怯まないで下さい。そして神が必ず彼らを裁かれるということも知って頂きたいと思います。穴に落ちるのは誰なのか、主は知っております。『「主よ、主よ。」と言うものが誰でも天の御国に入るのではありません。神のみこころを行なう者が入る』と、イエスは言われました。マタイ 7:20~23 のところに書いてあります。主の御名によって預言をしようと、主の御名によって病人を癒そうと、主の御名によって奇蹟を行なおうと、そういう悪霊を追い出すような、聖霊の働きと思えるような非常に熱心で、そしてアクティブで、いろんな活動がなされて、奇蹟なんかが起こっているようなそういう教会があります。でも、彼らの言うことにとらわれてはいけません。世界最大の教会であろうと、騙されてはいけません。惑わされてはいけません。主は、いつの日か、最後の日には「あなた方のことを全然知らない。」と言われてしまう時が来るかもしれません。主は知っているんです。主の御名を使って何かをする者たちが、必ずしも主に属しているわけではないということを、主は知っています。

まあ、実際に主に属している者ならば、証拠として、実として何が現れるのか。それが 19 節の続きに「**主の御名を呼ぶ者は**（「主よ、主よ。」と言う者でも本物であるならば、本当に主に属するクリスチャンならば、こういう者である。）、**だれでも不義を離れよ。**」その人のライフスタイルを見れば分かるわけです。その人の“良い実”と呼ばれるライフスタイルを見れば分かるわけです。実際に“不義から離れている生き方”言い換えれば“きよい生き方”をしているはずであります。本当に主に属する者ならば、きよい生き方をしているはずである。不義から離れているはずだから、一目瞭然であろうと。たとえその人が有名な牧師だろうと関係ありません。

20 節には『**大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。**』“大きな家”というのは教会のことを指しています。金や銀の器、これは尊いものに使われます。木や土の器は卑しいものに使われます。“卑しい”というのは「価値のない」という言葉でもありますが、“器”というのはその人・人物です。“神の器”という表現もあります。飾っておくような美しい金や銀の器もあるわけです。部屋の中心に、家の中心に置かれるようなところにこの尊いものは用いられる。一方で卑しい器は正にトイレの陶器の便器みたいに扱われるものもあるわけです。で、金や銀と木や土というのは、これは先程読んだ**第一コリントの 3 章**のところにも描かれておりましたけれども、世の終わりには火によって人のすべての行ないが評価されます。その火によって焼いても残るもの、それが金や銀や宝石によるもの。一方で焼かれて灰になってしまうもの、木や草や藁のもの、それは永遠にはカウントされない、卑しいものです。ですから私たちは卑しくない尊いものに目を留めて、そのために働く者でなければいけません。卑しいもののために働く以上、その者は卑しい器で終わってしまうわけです。永遠に価値のないもののために生きているものは、卑しい器で終わるわけです。教会の中にもそのような器があるということ、特にこれは本物の教師か、偽物の教師かという文脈ですから、特に尊い器というのは本物の教師テモテです。ちなみにテモテの名前の意味は“神を尊ぶ”です。神を敬う、尊敬する。尊いというこの言葉はギリシャ語で『ティメー』“time”と言います。テモテの名前の中に含まれています。『ティメー』という言葉と『セオス』(神)、“神を尊ぶ”がテモテという名前の意味です。テモテはですから間違いなく尊い器であると。名前の意味もパウロは意識して、敢えてこのようなアナロジーを使っています。

その一方で偽りの教師たち、偽牧師たちは、尊くない卑しい者である。21 節で『**ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。**すなわち、

聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。』私たちは神に用いられたいと願う者ですが、そのためには自分自身をきよめていく必要があります。みことばによって、水の洗いをもって私たちは洗いきよめられ、シワやシミや傷がない者に、きよい者に変えられていく。正に今私たちは、このバイブル・スタディーにおいて自分自身をきよめるという作業もしています。そのことによって尊いものになれるということ、尊い神の働きに与えられるということが言われています。ですから、みことばを学ぶという事は、神に用いられるということを目指しているところでもあります。そして、きよくなければ、きよい神には使われないということをいつも覚えたいと思います。みことばを学んでも、不義から離れずに汚れたもの、火で焼かれれば灰となってしまうようなものにいつまでも関わり合っているならば、その人はいつまでも神には用いられません。ですから、テモテはこのことを遺言として語られて、これからも私が世を去ってもあなたが私に代わって尊い器としてしっかり私の教えたことを引き継いで、そっくりそのままコピーして、それを継承して伝えていくように。そのためにはあなたは自分自身をきよめなくては行けない。

22 節にも『それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。』ここでは、若い時の情欲を避けなさいとありますけども、テモテは確かに若かったわけですがけれども、でもあなたが若くなくても、50 歳でも、60 歳でも、70 歳でも若い時の情欲を避けなくては行けないんです。勘違いしないで下さい。「私はもう若くないから、もう 50 だから、そんな情欲に駆られるなんてありません。」と。違います。あなたが何歳だろうと、若い時の情欲を避けなさいと言っているわけです。10 代でも、20 代でも、30 代でも、40 代でも同じです。50、60、70、80 でも若い時の情欲を避けなさい。避ける、これは逃げるということですがけれども、じゃあ、どこへ逃げ込むべきなのか。それは、教会へと言われています。「**きよい心で主を呼び求める人たちとともに**」ただ情欲を避けるだけじゃなくて、教会に逃げ込んで、そしてそこで多くの人たちと一緒に、きよい心を持つ人たちと一緒に、**義と信仰と愛と平和を追い求めなさい**。禁欲だけでは情欲を克服することは出来ません。ひとりでは無理です。でも、きよい心で主を呼び求めている人たちと一緒に積極的に、義と信仰と愛と平和を追い求めるならば、その情欲に打ち勝つことは出来ます。これはもちろん性的な罪だけではなくて、ポルノ中毒とか、どうしても不倫がやめられないとか、そういう情欲だけでなく、その前から **21 節**から言われているように、ありとあらゆる罪汚れです。依存症というものです。タバコが止められない人、お酒が止められない人、ポルノが止められない人、そういう人は神には絶対用いられません。汚れているからです。きよくないからであります。「でも、私は 1 人では止められないんです。」ならば教会に来て下さい。「教会に行ってるけど止められないんです。」その人は義と信仰と愛と平和を追い求めなくては行けません。これをタバコ以上に、お酒以上に、ポルノ以上に追い求めなければ行けないんです。それが出来ないならば、残念ですがけれども、あなたは神に用いられることは、まずないと思ってください。でも 1 人じゃないんです。渡り鳥のことを思い出して下さい。V 字のフォーメーションで渡り鳥は飛んでいくわけです。一羽で飛んでいくんじゃありません。仲間と一緒に飛ぶんです。でもその際には V 字のフォーメーションで飛んでいくわけです。頭の中でイメージしてみてください。先頭の鳥が後続のものをリードして行くんですが、後続のものは先頭の鳥の 60% の力で飛ぶことが出来るそうです。で、先頭の鳥が疲れたら後続に回って次の鳥が今度は余力を残しているので先頭に立って引っ張っていくわけです。疲れたら交代し、疲れたら交代し、みんなで V 字で、ピクトリーでいくわけです。ですからそのようにして私たちクリスチャンも 1 人では克服できない、1 人では負けてしまう、1 人では誘惑にすぐに陥ってしまう。であるならば、V 字のフォーメーションを組んでしっかりとリードしてもらえるアカウントビリティの関係を持って、常に自分の弱さをさらけ出して、その信頼できる人にアカウントビリティの関係を持ってそのことを相談し、「今私はこのことで悩んでいます。このことで苦しんでいるんです。止められないんです。つい依存してしま

います。」と言う人は、すぐに電話なり、メールなり、そしてすぐに会って、一緒に祈って、そして支えあって、目を光らせながら、監視しながら、自分では自分をコントロールできない時も、監視監督してもらって、そしてアドバイスしてもらって、厳しいことを言ってもらって、矯正してもらって、それで義と信仰と愛と平和を追い求めることで、必ず克服することが出来るようになると思います。その結果あなたは神に用いられるものに必ずなれます。

23 節『愚かで、無知な思弁を避けなさい。それが争いのもとであることは、あなたが知っているとおりで。』

24 節以降もお読みします。『²⁴ 主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍び、²⁵ 反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。²⁶ それで悪魔に捕えられて思うままにされている人々でも、目ざめてそのわなをのがれることもあるでしょう。』“主のしもべ”（ドゥーロス doulos）と言います。自ら進んで、自発的に奴隷となった者。出エジプト記 21 : 5 にあるイヤリングハートの、女性のミニストリーのテーマ聖句となっているところでもあります。奴隷というのは自分の意思を持たないんです。奴隷には何の権威も所有権もありません。で、かつてキリストを知る前の私たちは罪の奴隷だったんです。自分の意思を持たなかったんです。酒に飲まれていたんです。自分でコントロール出来ているつもり。タバコに飲まれていたんです。麻薬に飲まれていたんです。情欲に飲まれていたんです。完全に自分の意思を持たない奴隷だったわけです。ですから、私たちもその罪に奴隷化されるのではなくて、主のしもべとなって自分の意思を持たないで主の意思に従う者。自分がどう思うか、どう感じるか、どう決めるかじゃなくて、すべて主体は主です。自分じゃないんです。主がどう思われるか、主がどう感じるか。あなたは主のしもべでしょうか。主のしもべでなければ、あなたは尊い器としては用いて頂けないということを知って下さい。まだ自分の意思を優先しているようであるならば、まだ自分自身を捨て切れていないようであるならば、まだ他のものに卑しいものにとらわれているならば、あなたは卑しい人生しか送れないということです。価値のない人生しか送れないということです。

で、**25 節**のところで“反対する人たち”というのは、これは直訳すると「自分を反対の場所に置く者たち」常にそういう人たちが教会の中にあります。テモテにとっては大きな障害となっていたわけです。自分を反対の場所に置くような人たちが必ずいます。でも、テモテに対してパウロは「あなたはとにかく心優しくして、よく教えて、よく忍ぶように。根気強く、丁寧に、やさしく教えるように。もしかしたら神が彼らに悔い改めの心を与えるかも知れないから。」悔い改めの心を与えるのは神です。私たちが悔い改めの心を生み出すんじゃないんです。神が悔い改めの心を与えるんですが、頑固なままではそのギフトを受け取ろうとしないだけです。でも、根気よく、丁寧に、みことばを教え続けるならば、いつの日か神のその悔い改めのギフトをその人が受け取るようになるかもしれない。「諦めるなど。失望するなど。立派なキリストの兵士であるということを忘れてはいけません。で、あなたは競技者であることも。そのためにトレーニングしているじゃないか。栄冠を得るために苦しい思いをして、自分に厳しいことを課しているじゃないか。労苦する農夫のように実がなることを夢見て、あなたは汗水垂らしているじゃないか。忘れてはいけない。」

そして **26 節**で“悪魔”という言葉がありますが、この“悪魔に捕えられている”というのは直訳すると「悪魔の罠にはまっている」ということです。第 1 テモテ 3 : 6『また、信者になったばかりの人であってはいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。』信者になりたての人は教会のリーダーとしては相応しくありません。なぜならば、すぐに高慢になって、高慢な罪に陥って悪魔と同じさばきに遭う危険性があるからです。で、同じように **11 節**のところには『婦人執事も（女性のリーダーも）、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。』“悪口”

というのがギリシャ語の“ディアボロス”、で“ディアボロス”は「悪魔」と訳される言葉です。6節の“悪魔”も“ディアボロス”、11節の“悪口”も“ディアボロス”です。ですから、完全に悪魔の罠にはまって、中には悪口の罠にはまっている者もあるかもしれません。テモテのことを悪く言う、牧師のことを悪く言う人たち。そういう人たちが、テモテの牧会の対象だったわけです。大変ですね。自分を反対の場所に置くような人たち、意図的にです。常に牧師とは反対の立場に身を置くような人たちが聴衆の中にいるわけです。そして、その前には23節のところで“愚かで、無知な思弁”それを好む人たちも教会の中にいたわけです。愚かな話、愚かな教え、無知な思弁、それを好むような人たちにもテモテは説教しなければいけなかったわけです。反対する人たち、自分を反対の場所にいつも置くようなひねくれ者たち。で、26節にある悪魔の罠にはまっているような人たち、彼らもまたテモテの牧会の対象であったわけです。で、それに加えてみことばに対しては何の飢え渴きも感じていないような人たち。「なぜ聖書なんか読まなきゃいけないんですか。なぜバイブル・スタディーに行かなきゃいけないんですか。私には必要ありません。」そういう人たちも当然対象となっているわけです。そういう連中を無視するならば、これほど楽な事はありません。でも、無視するならば、彼らは悪魔にとらわれてしまうんです。悪魔の罠にはまったまま滅んでしまうわけです。まあ、彼らが目覚めるかもしれない。26節にある“目ざめる”という言葉は原語では“泥酔から目覚める”という言葉であります。サタンは偽り者です。「聖書にそんなことは書いていない。神はそんなことは言っていない。」そういう事を言って、嘘で人を酔わせるわけです。そのサタンの嘘によって泥酔させられてる者を牧師は目覚めさせる、警察官のような仕事です。警職法の3条に泥酔者の保護と矯正というのがあります、警察に泥酔者は保護されるわけです。具体的にはパトカーで搬送してもらって、そして保護室に入れて保護してもらえ。警察官の職務です。牧師もサタンの嘘によって泥酔してしまっている者たちを搬送して、そして保護室で保護しなくてはいけない、目覚めさせなきゃいけないわけです。ものすごい忍耐です。酔っ払い相手に。よく昔はテレビのドキュメンタリーで、特に大阪の警察官が酔っ払っている人たちを相手に、本当に丁寧に親切に保護しようとしている。そういう悪態をつく者たちにも逆ギレすることなく忍耐をもって接している。そういう姿を見受けて、私は敬意を表したいと思えますけども、教会でそういう泥酔者がいっぱいわけです。牧師に悪態ついてくる人たちがいるわけです。まるで何様かのように、サタンの嘘に泥酔させられている者は牙をむくわけです。それでも牧師は彼らを切り捨ててはいけないと言っているんです。それは職務なんです。是非皆さんは、その牧師のために祈って頂きたいと思えます。彼らは祈りを必要としております。本当に大変な仕事なんです。兵士です、競技者です、農夫であります、主のしもべであります。彼らはみことばをまっすぐに解き明かす労働者であります。で、もちろんこれは牧師だけの仕事ではなくて、クリスチャン全般においても当てはめることの出来ることだと思います。私たちも熟練した者を目指して、牧師のようになることを目指して欲しいと思えます。牧師は大牧者であるイエス・キリストを目指して、日々自らをきよめつつ、自らを鍛錬し、そして忠実なしもべとして努力を払っているところでもあります。私たちもそれに倣って、パウロは「私に倣いなさい。」と、「私を見習いなさい。」と何度もいました。それは不遜な高慢な態度ではありません。それは親が子供に対して言うのと同じ言葉です。「お父さんを見て、お父さんのようにしなさい。お母さんを見て、お母さんのようにしなさい。」そう言える親でなければいけないのは当然のことです。牧師が「私ようになりなさい。」と、そう言えなければ、それは牧師としては失格だということです。「私は弱いですから。牧師だって人間ですから。」そういう言い訳は通用しないんです。親がそういう言い訳をしたら、子供に何と申し訳をすればいいんですか。「親だって弱いんだから。」そういうこと言い始めれば、子供だっていくらでも言い訳をします。「私は強くないんです。」であるならば、キリストイエスの恵みによって自分自身を強くしなければいけないんです。「強くなりなさい。」強くならないといけません。弱いままでいいんじゃないです。弱くてもいいですけども、でも強くならなければいけないです。で、間違っ

いことは、私たちは自分の行ないによって自分を強くするのではなくて、キリスト内にある恵みによって自分を強くしなければいけないということです。これがパウロの遺言ですが、私の遺言でもあります。MGFの一人一人は、キリストの恵みによって強くならなければいけません。マラナサ・グレイス、この“グレイス”は恵みです。これが教会の名前に使われていることには、意味があるんです。ただの素敵な名前じゃないです。グレイス、恵みです。この恵みによって私たちは強くなれるんです。この恵みがなければ、私たちは決して強くはなれません。まあ、このこともこの後 **3 章、4 章**と続きますので、心に留めて頂きながら、次回また楽しみにして頂きたいと思います。神の働き人として、神に用いて頂ければ、テモテへの手紙をしっかりと学んで下さい。また牧師を目指す人たちも是非これを学んで下さい。そして今現在牧師をしている人たちも、このメッセージを聞いていると思いますので、是非弱気にならないで下さい。おくびょうにならないで下さい。「誰も私の事なんか聞いてくれない。皆が皆反対するんだ。」悪魔の罠にとられてしまっているような人たちもあるわけです。でも怯んではいけません。自分の仕事を忠実に、ただ淡々と、粛々と続けなくてはならない、投げ出してはいけない。テモテのように私たちも励ましを受けながら、是非テモテのように変えられていきたいと思います。では、今日はこれで終わりたいと思います。